

これから

- ▶いかにして利用者さんが主体になって活動できるような環境を作っていくか
- ▶事業所との話し合いの場

13

最後に

- ・これからのサークル活動
心の病を持たれている方と地域との交流に関わっていきたい！



てんぷらあいす

14

これからも「てんぷらあいす」を
よろしくおねがいします！！

ご清聴ありがとうございました。

15

サークル名 たけのこサークル

発表者 社会福祉学科2年生
宇都宮真奈(部長)、佐熊美樹

活動分野 田川市手をつなぐ会「ふきのとう」
(以下「ふきのとう」)
飯塚社会福祉協議会主催「日曜ひろば」
(以下「日曜ひろば」)

部員数 32名

ミーティング 毎月1回3号館教室



こんにちは。たけのこサークルの紹介を始めます(図1)。

たけのこサークルは、平成21年7月に発足したサークルです(図2)。今から10年以上前から、「田川市手をつなぐ会ふきのとう(「障害」児・者問題を考える会)」の託児の場に多くの学生が関わっていましたが、「参加する学生同士の交流の場がない」といった課題がありました。そこで、「ふきのとう」の託児ボランティアのつながりをより深めるため、サークル化を計画しました。そして部員に『ふきのとう』やその託児の場で大切にしていることを伝えていくために「ふきのとう」の事務局長の方と連携をとりながらサークルを発足させました。

このサークルは、障害児及びきょうだい児の託児ボランティアです(図3)。ここでいう「きょうだい児」とは障害のある子どものきょうだいのことです。また託児とは子どもを預かり面倒を見ることです。

現在部員32名で活動しています。活動拠点は「ふきのとう」と飯塚市社会福祉協議会の「日曜ひろば」です。また、毎月1回「定例会」を行っています。

「ふきのとう」は、障害のある子の保護者の方や、小・中学校の先生方等で構成する団体です(図4)。「『障害』児・者の基本的人権の確立」をめざして、「つながる・まなぶ・つたえる」という3つの柱を中心に活動されています。

私たちは保護者の方や先生方が学習会をされている間、子どもたちと一緒に屋外で鬼ごっこをしたり教室で絵を描いたりして遊んでいます。こ

でいう子どもたちとは、障害児やそのきょうだい児です。

「ふきのとう」では、「居場所」「つながる場」としての託児の場づくりを大切にしています(図5)。障害のある子どもやそのきょうだいは、様々な場面で抑圧を受け、きつい状況におかれています。だからこそ子どもたちが日頃のきつい部分を、何もかも忘れてありのままの自分を表現できる場所の確保が必要ではないかと思います。そんな場を「居場所」と考えた時「ふきのとう」の託児の場は、まさに子どもたちの「居場所」となっています。

そして「ふきのとう」以外にも活動を広げたいとの思いで、「日曜ひろば」にも参加しています(図6)。「日曜ひろば」では障害児を1日預かり、一緒に遊んだりご飯を食べたりおやつを作ったりしています。親御さんの休息する機会を設けること、子どもが安全に過ごせる場を提供すること、社会性を学ぶことを目的としています。

社会性を学ぶというのは、学生ボランティアや障害をもった子ども同士と一緒に過ごすなかで、沢山のルールを身につけることです。障害の種別や程度を問わないため、様々な制度にとらわれることがありません。

例えば、社会性を身につけるために、私たちは日曜ひろばで子どもと遊ぶ前に、まず時間の概念をきっちり理解させるようにしています(図7)。ただ口頭で言うのではなく、紙に時計を書き「12時はご飯」「4時は帰る」などといった感じで子どもたちに理解してもらえるように工夫しています。時間の概念を理解させている理由は「共に過ごす」

「時間を守る」という社会性を育てるため、方向転換をしやすくするためです。方向転換をしやすくするためというのは、次に何をするのかきっちりさせておかないとパニックになる子どももいるからです。

活動を通して学んだこと、それぞれが持っている情報などを交換するため定例会を行っています(図8)。

やはり多くの学生が子どもとの接し方について悩んでいます。例えば「コミュニケーションがうまくとれない子とトイレに行った時、どうしてほしいのかわからない」「自分は子どもに必要とされているのだろうか」といったことです。そんな悩みに対して、経験を積んだ学生から「自分がトイレに行ったときどうするか思い浮かべたらいいよ」「子どもの視線(例えばトイレトーパーの方を見ているなど)を感じ取ったりするといいいよ」といったアドバイスを受けました。

そして保護者の方から「学生は体力もあるし、子どもたちにとってはお姉さんお兄さん的存在なので、子どもたちも毎回楽しみにしているよ」という話を聞きました。完全に悩みが解消されたわけではありませんが「定例会」での学び合いが、次からのボランティア活動に活かされているのを感じています。

サークルでの今後の目標は参加した子どもたちから「来てよかった」「また来たい」と心から思ってくれるような託児の場を作り上げていくことです(図9)。そのために、子どもたちがより自分を出せるような環境づくりを行っていきたいと考えています。

ボランティア活動を通して「出会い・気づき・学び」を大切にするとともに、取り組みを重ねて

学生自身も成長していきたいと思います。

私はこの活動に参加するまで「障害」というのは身体障害、知的障害というイメージがありました(図10)。しかし実際に活動に参加して初めて関わった子どもは、発達障害のある子どもでした。

最初、どこに障害があるのだろうと思いました。今まで子どもとさえあまり関わったことがなかったため、どのように接してよいのかわからず先輩に頼ってばかりでした。先輩は子どもとうまく接しているのを見て、自分には向いていないなと思いました。しかし何度も参加していくうちに子どもたちと仲良くなり活動が楽しくなりました。そして先輩、後輩と関わっていくなかで自分に足りないものがわかってきました。例えば、私は子どもが困っているとすぐ代わりにやってあげたくありません。しかし先輩は自分でやるように上手に促しています。そういう所を私は見習っていきたいと思います。

また私は大学で社会福祉を学んでいます。福祉の法律名や内容を覚えるだけでなく、多くの人たちと関わっていき、その人たちの気持ちや思いを知ることも大切だと感じています。

まだまだ経験も浅く未熟者な私たちですが、これからもたけのこサークルをよろしく願います。

御清聴ありがとうございました(図11)。




たけのこサークル

社会福祉学科 2年 宇御富 真奈
2年 佐藤 美樹

1

サークル発足に至る経緯



今から10年以上前から
多くの学生が「田川市手をつなぐ会ふきのとう」に
ボランティアに行っていた
→「参加する学生同士の交流の場がない」
という課題が発生

これらを解消するために
平成21年7月「たけのこサークル」を発足

2

「たけのこサークル」とは

障害児およびきょうだい児の託児ボランティア

サークル人数 32名


活動拠点 「田川市手をつなぐ会ふきのとう」
飯塚市社会福祉協議会「日曜ひろば」

毎月1回「定例会」を開催

3

ふきのとう

～つながる・まなぶ・つたえる～




障害のある子の保護者や
小・中学校の先生等で構成する団体

～私たちの活動～
毎月1回程度保護者の方や先生方が
学習会をされている間、
子どもを預かり一緒に遊ぶ

4

「居場所」とは



障害児やきょうだい児は様々な場面で
抑圧を受けきつい状況におかれている

↓

ありのままの自分を表現できる
場所の確保が必要


↓

「ふきのとう」の託児は
まさに子供たちの「居場所」

5

日曜ひろば

～飯塚市社会福祉協議会の独自事業～




なぜ日曜ひろばが必要？

- ・親御さんの休息する機会を設けるため
- ・子供が安全に過ごせる場所を提供するため
- ・社会性を学ぶため

どんなことをしているの？

子供たちと1日遊んで
ごはんやおやつを食べたりしてる



6

時間の概念

日曜ひろばでは・・・



・「共に過ごす」「時間を守る」といった
社会性を育てるため

・方向転換をしやすいするため



7

定例会での学び



子どもとの接し方

- ・声かけ ・コミュニケーションのとり方
- ・**トイレの介助**
- ・母親と離れて泣いてしまう時の対応の仕方

自分って必要なのか

8

サークルの目標



「来てよかった」「また来たい」
と思ってくれるような託児の場づくり

9

私の意義

～参加するまで～

「障害」=身体障害、知的障害というイメージ

～参加後～

私、向いているのか?? →活動が楽しい

【学んだこと】

- ・自分に足りないものがわかった
- ・当事者の気持ちや思いを知ること

10

ご清聴
ありがとうございました。



11

サークル名 献血推進サークル

発表者 人間形成学科 2年
中田友佳里(部長)
部員数 7名



クリスマスキャンペーンの様子

こんにちは、献血推進サークルです(図1)。
人間形成学科2年の中田と申します。どうぞよろしくお願ひします。

まず献血とは、輸血用の血液や血液製剤を作るために無償で血液を提供して頂くことを献血と言ひます(図2)。

日本赤十字社の方が一任して手掛けています。
現在、血液は人工的に作る事が出来ず、この、輸血用の血液・血液製剤の原料はすべて、献血によって賄われています(図3)。

このグラフは、1994年から2008年の年代別の献血者数の推移を表しています(図4)。この10年間ほどの間に、総献血者数は約160万人ほど減り、特に10代20代の若年層の献血者が急激に減少していることがわかります。

そうした若年層の献血離れが進み、血液が慢性的に不足している状態です(図5)。

そこで私たちは、若年層を中心に献血のこともっと知ってもらひ、献血者を増やし、血液の安定した供給を目指しています(図6)。

年間の活動は大方このような流れで進みます(図7)。

私たちは北九州学生献血推進連盟という団体に所属しており、北九州の5大学と協力をし、また血液センターの方にご指導いただきながら活動をしていきます。

毎月1回の定例会で各大学の代表者が集まり会議を行い、年2回、8月と12月のサマーキャンペーン・クリスマスキャンペーンというイベントに備えて、話し合いや準備を進めています。

こちらが、サマーキャンペーン・クリスマスキャンペーンの様子です(図8)。

普段、献血は各地の血液センターでしかできませんが、私たちは献血バスを町中に配置していただいて、街頭献血というものを行なっています。

こういった感じで献血にご協力をお願いしますという呼びかけをしたりですとか(図9)、献血をして頂く方に温かい飲み物をさし上げたり(図10)、お礼の品としまして協賛品として粗品を差し上げたりしています。

お子さん連れの方も献血に来ていただくことがございますので、そういった方でも安心して献血が出来るようにアトラクションを作り、子どもたちと遊んだりしています(図11)。

今紹介したキャンペーンもそうですが、活動は学生主体で行なっています(図12)。

キャンペーンの際に差し上げる粗品や、事前のラジオ・新聞などでの宣伝も、学生が一から企業に連絡を取り、協力をお願いしています。

今後の活動をする上での課題としては、まずメンバー不足があげられます(図13)。連盟全体では70名ほど所属していますが、県立大学の献血サークルだけだと、10人にも満たないサークルですので、一人の活動量が多く負担になることもあります。二つ目は他大学との連携の問題です。そして三つ目、金銭面での問題もあります。

他大学との連携ですが(図14)、北九州各地に大学が散らばっているため、直接話し合う機会を多くつくれないことがほとんどです。メールや電話などでは伝えることが難しかったり、返信が来ない、音信不通になるなど行き違いも生じるため悩みどころではあります。

金銭面での問題ですが(図15)、毎月の定例会以外にも打合せや事前準備、協賛、保護活動についての費用は学生が負担することも多く、やりたい

ことと費用との兼ね合いが大きな課題となっています。

最後に、余談ですが先日2月25日に献血ツアーというものを開催しました(図16)。今までは、センターの方にこちらへ来ていただいていたので学内献血しかしていなかったのですが、私たちがセンターに出向き実際の献血事情を知ってもらえて、興味深い経験に出来たのではないかと思います。

今後も、色々な新しい取り組みをしていきたいと考えています。

私たちのこのような学生の活動を知っていただいて、献血を身近なものに感じてもらえれば幸いです(図17)。

ご清聴ありがとうございました(図18)。


献血推進サークル



中田友佳里

1

献血とは...



輸血用血液や血液製剤を作るため
無償で血液を提供して頂くこと

日本赤十字社が手掛けている

2

手術などのときに使用される

輸血用の血液

血液製剤の原料

献血によって賄われています

3



若年層の献血離れが進み

血液が慢性的に不足している状態

5

活動目的

1人でも多くの人に
献血を知ってもらい
血液の安定した供給を
目指すこと

6

年間活動計画

- 5月 博多どんたく パレード参加
- 6月 福岡と合同研修
- 8月 **サマーキャンペーン・サミット**
- 11月 福岡と合同研修(久留米センター見学)
- 12月 **クリスマスキャンペーン**

◆ 毎月の定例会

→勉強会(世界の献血事情・血液に関する知識、各大学調べ、発表)

7

街頭献血の様子



8



9



10



11

活動は**学生主体**



- キャンペーン当日のステージ・アトラクションの企画、運営
- 企業への協賛のお願い
- ラジオ・新聞社への宣伝

など

12

今後の課題

- ◆メンバー不足
- ◆他大学との連携
- ◆金銭面での問題



13

他大学との連携

- ◆直接会って話す機会が作れず
メールや電話などでは
相互理解が難しい
- ◆連絡不足や行き違いが生じる

14

金銭面での問題

定例会以外での各大学との打ち合わせ
イベントの事前準備
協賛品の受け取りや電話がけにかかる費用

赤十字の方に負担しきれないところは
学生負担

「やりたいこと」と「負担」との兼ね合い

15

第一回 献血ツアーの開催

2月25日
県大旧門から八幡の血液センターへ



今回は7名の参加者

今後隔月ごとに
開催予定



16

学生の活動を知って
献血を
身近なものに感じてもらえたら…

17



ご清聴
ありがとうございました。

ぜひ、献血にご協力
をお願いします！

18